

予言と科学

21世紀の現代、夏目漱石が作品の中で展開した「個性の発展から起こる自殺・非婚・離婚」が「事実」として浮き彫りにされている。これを「漱石の予言」という言葉で表現する人もあるが、私はそれを自分の中で「漱石の科学的分析」と置き換えたい。「科学＝Science」とは物理学・化学・政治科学・社会科学・人文科学と幅広く用いられる言葉である。私は「予言」という言葉には、無から発生するインスピレーション的印象を持つ。言うなれば少し神がかり。しかし漱石は実に論理的に未来考察を行っている。そこには確かな根拠がある。だからむしろ漱石は「心理学」から未来を想定した「科学者」であったと思う。しかしこれも適切な表現ではないだろう。漱石に「文学者」「心理学者」「科学者」などという固定した肩書は要らない。何せ「バランス脳」の持ち主なのだから。何か一つ行うごとに肩書を付加するのは現代日本競争社会特有の慣習であり、漱石は肩書より人間の本質を重んじる人間だった。そして漱石が示した「未来考察」は文明発達に伴う必然であって、それを文字にしたことに価値がある。その言葉は「予言」ではなく、現代の我々が「必然的存在性」として掘り出せる認識である。人間とは不変の存在であると思う。進んでは崩れ、崩れては進んで行く社会の中で、人間の本質はおそらく変わらない。ただ文明変化に伴う時代に応じてそれぞれの自己の出し方が変わってくるだけだ。例えば先人の論を90%引いて10%の新論を加えて1冊の論文を成すように、少しずつ変化する社会背景のもとで人間は未来へ小さな歩を進める。決して一気に別物に転換するわけではない。人間は結局人間でしかない。そしてその人間の必然は『吾輩は猫である』の最終章に読み取ることができる。

まず親しい仲間が一堂に会し苦沙弥先生が語る。それは漱石自身の神経衰弱体験から発した『死ぬ事は苦しい。しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい』（以下本文引用は岩波文庫）という観念から「どうして死ぬのがいいか考える」論へ発展する。すると「大抵の者は知恵が足りないのを放置しておくうちに世間がいじめ殺してくれる、しかしなし崩しにいじめ殺されては満足できない。したがって斬新な名案として自殺が浮かび、今後、自殺者は皆独創的な方法をもってこの世を去る」論へと発展する。そして自殺は発展すると「誰かが殺してくれるのを待つ＝他殺」につながる。これは現代に当てはめればうつ病患者が増え、その結果自殺者が増え、さらに自殺による自己完結ができない人間が、全く関わりのない善良な人間を巻き添えにして自分の死の決定を他人に委ねるというむごい事件となる。それは迷亭の語る「個性の発展による競争」に知恵の光明を見出せなかった個人の行く末であり、社会の悲劇である。

そして次に非婚主義の（現実に根を張らない）迷亭の「未来記」として『人間全体の運命に関する社会的現象』が語られる。そのベースには漱石が見たロンドン社会の現実と、彼が読んだ西洋書物の知識がある。迷亭は語る。一国の主、一郡の主、一家の主という代表者以外の人格がまるでなかった、あるいはあっても認められなかった時代から、個性を主張する時代へと移り変わっていく明治社会。強い個性の裏には弱い個性が隠れている。したがって『個人が平等に強くなったから、個人が平等に弱くなった訳になる』そこで強さを拡張し、弱さを精いっぱい張りつめると生きているのが窮屈になる。だから個人間の余裕を持とうとして互いにわがまを張ろうとする一親子が別居する。そして離れるものがなくなったら今度は夫婦が別れる。女学校で鍛

